

2006年（第15回）「ブループラネット賞」の受賞者

「潜在自然植生」の概念に基づく森林回復・再生の理論を提唱・実践し、防災・環境保全林、熱帯雨林の再生に成功して、地球の緑を回復する手法の確立に貢献した

宮脇 昭博士
（日本）

持続可能な開発の概念の創設に関わり、長年国連関連会議で全地球的環境政策の推進に主導的な役割を果たし、ヨハネスブルグサミットの成功に向け大きく貢献した

エミル・サリム博士
（インドネシア）

財団法人旭硝子財団（理事長 瀬谷博道）の地球環境国際賞「ブループラネット賞」は、今年で第15回目を迎えました。本賞は、地球環境問題の解決に関して科学技術の面で著しい貢献をされた個人、または組織に対して毎年2件贈られるもので、当財団理事会、評議員会は本年度の受賞者を次のように決定しました。

1) 宮脇 昭博士（日本） 国際生態学センター研究所長
横浜国立大学名誉教授

自然の立地条件に最も適した土地本来の植生を意味する「潜在自然植生」という概念に基づく森林回復・再生の理論を提唱する一方、日本全国の大学の植物生態学系研究室の協力を得て、日本中の植生を調べ上げ、日本における植生調査の集大成となる現存植生図および潜在自然植生図を合わせて本文6000ページにも及ぶ「日本植生誌」全10巻を編著しました。そして、国内海外あわせて1500ヶ所以上で現地植生調査に基づき再生の理論を実践することにより、国内では20～30年で限りなく自然林に近い防災・環境保全林を再生すると共に、海外でも熱帯雨林の再生に成功するなど、具体的実績をもとに生態系の基盤である地球の緑環境回復の可能性と成果を提示しました。

2) エミル・サリム博士（インドネシア） インドネシア大学経済学部・大学院教授
元インドネシア人口・環境大臣

地球環境問題の解決を目指し国連が世界的取り組みを本格化した1980年代初頭以降、アジアを代表して世界の環境政策の構築に貢献するとともに、アジアの途上国全体の環境政策を指導してきました。インドネシアが経済発展の道をたどる過程で15年にわたって環境大臣を務め、環境行政の構築・発展に尽力すると同時に、開発計画に環境配慮を統合させる考え方を世界に先駆けて育み持続可能な発展のモデルを提示しました。先駆的な業績は国際的にも高い評価を受け、「環境と開発に関する世界委員会」、「ヨハネスブルグサミット」等、国連の代表的な環境活動で大きな役割を果たすのみならず、環境問題に関する世界的な議論においてアジアのプレゼンスを高めました。

- 受賞業績1件に対して、賞状、トロフィーおよび副賞賞金5千万円が贈られます。
- 表彰式は11月15日（水）に東京會館（東京都千代田区）で挙行政され、翌11月16日（木）に受賞者による記念講演会が国際連合大学（東京都渋谷区）で開催されます。

※本リリースは、環境省記者クラブならびに環境省記者会に配布しています。
また、インターネットでも6月22日からご覧いただけますので、ご参照ください。

本年度（第15回）の選考経過

国内 1000 名、海外 1300 名のノミネーターから 106 件の受賞候補者が推薦されました。候補者の分野は、多い順に生態系 32 件、気候・地球科学 19 件、環境経済・政策 16 件などでした。

候補者は 25 ヶ国にまたがっており、途上国からの候補者は 19 件あり、全体の 18%に相当します。

選考委員会による数次の審査をもとに、当財団の理事で構成する顕彰委員会に諮った後、理事会、評議員会で、1 件は宮脇昭博士が、もう 1 件はエミル・サリム博士が受賞者として正式に決定されました。

■本件に関するお問い合わせ先

財団法人 旭硝子財団	〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ 2 階
事務局長 鮫島 俊一	TEL : 03-5275-0620 FAX : 03-5275-0871
	e-mail : post@af-info.or.jp
	URL : http://www.af-info.or.jp

受賞者の業績及びプロフィール

宮脇 昭博士 (Dr. Akira Miyawaki)

宮脇博士は広島文理科大学生物学科の卒業論文のテーマに雑草生態学を専攻し、卒業後、横浜国立大学助手、東京大学大学院研究生として日本全国で雑草生態学の現地調査を行い、研究論文をまとめました。この論文が、1956年に世界で初めて潜在自然植生という概念を発表したドイツ国立植生図研究所長のラインホルト・チュクセン (Reinhold Tuexen) (1899-1980) 教授の目にとまり、請われて1958年に教授の下に留学しました。教授が発表した潜在自然植生とは土地本来の植生を意味し、一切の人間の干渉を停止したと仮定したとき、現状の立地条件が支持し得る自然植生のことを言います。

博士はドイツで教授から潜在自然植生の概念を学び、1960年秋に帰国後、日本各地の社寺林(「鎮守の森」)などに残る自然植生と、さまざまな人間活動の影響下にある山地、河川沿い、農山村、都市などの植生の調査を1万数千ヶ所を実施し、現存植生図と潜在自然植生図を作成しました。現存植生図は生態学各分野、地理学など隣接分野の研究の基礎となると共に緑の現状診断図として具体的な植生診断や土地利用に有用であり、潜在自然植生図は土地本来の緑環境回復のための基礎図となります。

さらに、1980年から10余年をかけ、博士は日本全国の大学の植物生態学系研究室の協力を得て、日本中の植生を調べ上げ「日本植生誌」全10巻を執筆、編纂・出版しました。これは現存植生図および潜在自然植生図を合わせて本文6000ページにも及ぶもので、日本における植生調査の集大成としてのみならず、地球規模で比較可能な植物群落単位の決定と、その総合的な植生大系は、世界の植生研究の基本資料として高い評価を得ています。これら調査・研究を通して、日本の照葉樹林帯の森の主役(主木)が「鎮守の森」にあるような、シイ、タブ、カシ類といった常緑広葉樹林であって、尾根筋、急斜面などきびしい立地に局地的に自生していたスギ、ヒノキ、カラマツ、マツなど木材生産を目的に植えられたものは土地本来のものではないことを明らかにしました。

博士は、ドイツ留学から帰国して以来続けた日本各地の「鎮守の森」などの研究で、現地調査をすればするほど、それまで自然の森だと思っていた森や林が土地本来の「森の素顔」、潜在自然植生からあまりにもかけ離れていることを知り驚きの念を持つようになりました。この驚きが一つの契機となり、単に今ある見かけ上の緑だけではなく、我々の祖先がつくり残してきた伝統的な「鎮守の森」に象徴される土地本来の森を植生生態学的な現地調査・研究にもとづき新たにつくるべきだと考え始め、ふるさとの森、現代的な意味でいう環境保全・災害防止林、水源保全林の形成を提案しました。しかし、博士の主張は、はじめなかなか認められませんでした。

1970年代初め、博士の話聞いた新日本製鐵株式会社の環境担当者から、「あなたの言う森を各製鉄所の周りにつくりたい」と言われ、まず、大分製鉄所で森づくりが始まりました。場所が埋立地であったため、近隣の宇佐神宮林や柞原(ゆすはら)八幡宮の社叢林の調査から潜在自然植生を判定して植える木を決め、試行錯誤を経てポット苗をつくることにしました。そのポット苗を自然の森のシステムに沿って混植・密植することでふるさとの木によるふるさとの森の形成が可能になりました。新日鐵大分をはじめ、各製鉄所には植樹後18年で大きな森が形作られました。その後も、先見性と実行力をもった各電力会社、建設、電機、流通業界をはじめ、多くの企業、地方公共団体、国土交通省をはじめとする各省庁の支援を得て、海岸沿いの埋立地や人工島から、海拔1000m以上の道路建設による崩壊斜面にいたるまで日本全国1300ヶ所におよぶほとんどの植生域で、多層群落の防災・環境保全林の再生を試み成功しています。

博士は1978年からはタイ、インドネシア、マレーシアの植生調査を行いました。従来、熱帯雨林は伐採・火入れなどでいったん破壊されると回復はほとんど不可能とされていましたが、現地植生調査にもとづき、生態学的手法で植林を行えば熱帯雨林の再生も可能であることを提案しました。熱帯林でも、まず土地本来の森のリーダーとなるのがどの木かを選定することから始まります。土地本来の森を育てるには、リーダーになれる木を植えることが重要で、さらに、主木

を支える約 40～60 種以上の幼木を植えます。1 種類の木を等間隔で植えるのではなく、高木、亜高木など土地本来の森の構成種群の幼木を不規則に混ぜて植え、それぞれの木を競争、我慢、共生させます。1990 年からはマレーシアのサラワク州ピンツルで三菱商事の積極的な協力を得ながら熱帯雨林再生に取り組みました。潜在自然植生の主木であるフタバガキ科の樹種群を主に 201 種類の種子を集めて 60 万本のポット苗を育成し、毎年様々な立地条件下で植樹を行っています。1991 年に植樹された幼苗は 2005 年には樹高 20m 以上に育っており、限りなく自然に近い多様性に富んだ熱帯雨林が再生しています。

従来の遷移説と呼ばれる理論（米国クレメンツ）によれば、荒廃した裸地から土地本来の多層群落の森が回復するのに、日本国内で 150～200 年以上、東南アジアなどの熱帯雨林では 300～500 年かかるとされていましたが、博士は潜在自然植生の主木を中心にできるだけ多くの構成樹の種を集め、根群の充満したそれら樹々のポット苗を自然林のシステムにそって混植、密植することにより、20～30 年で限りなく自然林に近い防災・環境保全林の再生が可能であることをエコロジカルに立証しました。また、この方式で再生された森は、地上には高木層、亜高木層、低木層、下草層からなる多層群落を形成し、地中にはバクテリア、ダニ類など土壤生物群集が自然に近い多様性を回復していることを明らかにしました。

こうして、厳密な現地植生調査と生態学的理論に基づいた土地本来の森林回復・再生法、いわゆる宮脇方式“Native forests by native trees”を確立しました。

博士のプロジェクトは、92 年の地球サミットに向けてまとめられた「持続可能な開発のための経済人会議（BCSD）」の報告書「チェインジングコース」（1992）にもケーススタディとして紹介されています。また、博士は 91 年のボン大学での「熱帯林生態系再生シンポジウム」をはじめ、国際生態学会、国際植生学会、国際植物学会などでも「生育状態、各立地との関係、CO₂の固定予測」など多面的な研究成果発表を多数行いました。従来の商業植林と異なり、潜在自然植生に基づく土地本来の森林生態系の再生を目的とし、現実に成果をあげ、実証したことが、国際的に評価されました。

同様のコンセプトで、タイの乾性熱帯林、ブラジル・アマゾンの低地熱帯林、チリ・コンセプションのノトファグス（南極ブナ）林他の再生にも着手し、それぞれ確実に土地本来の森が再生しています。

また、博士は中国の万里の長城沿いにモウコナラ林の再生を目指して 1998 年からイオン環境財団と北京市による 4000 人 40 万本植樹のプロジェクトリーダーとして、日中協同植樹祭を開始し、2004 年には樹高が 3m を超えるものもあって、一部を除き確実に生育しています。中国ではそのほかに上海市の哺東新開発区、青島、寧波、馬鞍山（マーアンシャン）などで、潜在自然植生に基づき、行政と市民協働の緑環境再生を進めています。

博士は今から 30 数年前、当時まだ十分予測されていなかった地球規模の環境破壊、生物多様性など様々な環境問題に危機感を持ち、人類生存の基盤としての土地本来の森の重要性という今日的意義を掲げ、厳密な現地植生調査・研究と生態学的理論にもとづく「宮脇方式」といわれる土地本来の森林回復・再生法を確立し、国内外で実験兼本番の具体的成果をあげています。

〔略歴〕

1928	1 月 29 日岡山県生まれ
1952	広島文理科大学生物学科卒業
1958-60	西独植生図研究所研究員
1961	広島文理科大学理学博士号取得
1961-62	横浜国立大学 講師
1962-73	横浜国立大学 助教授
1973-93	横浜国立大学環境科学研究センター教授
1985-93	横浜国立大学環境科学研究センター所長

1993- 横浜国立大学 名誉教授
1993- 財団法人 国際生態学センター 研究所長

〔主な受賞歴等〕

1970 毎日出版文化賞「植物と人間」
1990 朝日賞
1990 ドイツ・ゴールドエンブレム賞
1992 紫綬褒章
1995 ドイツ・チュクセン賞
1996 日経地球環境技術大賞
2000 勲二等瑞宝章
2002 日本生活文化賞個人賞
2003 日本生態学会功労賞

エミル・サリム博士 (Dr. Emil Salim)

サリム博士は1930年にインドネシアの南スマトラで生まれ、オランダ統治下の幼少期にはオランダ人子弟の小学校で、日本の占領下だった少年期には日本人学校で教育を受けました。「日本語を強制された3年半の寮生活と教練は貴重な経験だった」と博士は述懐しています。エンジニアだった父からは論理の重要性を、また敬虔なイスラム教徒の母からは深い信仰心を学び、長じては経済に強い関心を抱いてインドネシア大学で経済学を専攻しました。

大学卒業後、同大学経済学部で助手を務めた博士は1959年にカリフォルニア大学バークレー校に留学、経済学の博士号を取得しました。1964年に帰国した博士はインドネシア大学で教鞭をとるかたわら、「バークレー・マフィア」と呼ばれる留学生仲間とともにスハルト政権の大統領付経済学専門家チームに参加し、市場原理を重視した上でのマクロ経済健全運営路線による国家建設に取り組んで、国の経済運営に影響力を持つようになりました。

1971年、41歳で国家改革担当大臣に任命され、以後1993年までの22年間、交通・通信・観光、開発管理・環境、人口環境担当と4期にわたって閣僚を務めました。1978年にはインドネシアで初の環境大臣に就任し、同国が経済発展を歩む中で環境破壊を危惧したスハルト大統領の強い要請を受け、経済発展と環境保全を両立させる環境政策を実行しました。さらに、社会の番人としてのメディアやNGOの重要性を訴え、環境保護意識が社会に浸透するよう働きかけました。博士の努力によって、多数の大学に環境問題研究センターが設立され、NGOが組織されています。

5年後の1982年、博士はインドネシア初の環境に関する総合的・統括的な法律である環境管理法を制定、さらに環境保全に関わる法律を起案したり、環境影響管理庁を創設する等、環境行政の礎を構築しました。1984年に「環境と開発」、そして1986年には「環境に優しい開発」を著し、世界に先駆けて開発計画に環境配慮を統合させ、開発に環境の視点が盛り込まれるよう尽力しました。

持続可能な社会の構築を目指した博士の先駆性は国際的に高い評価を受け、国際舞台で重要な役割を担うこととなりました。たとえば、1984年から87年までノルウェーのブルントラント首相が議長を務めた国連「環境と開発に関する世界委員会」(ブルントラント委員会)に日本の大来佐武郎氏とともにアジア代表として参加し、「持続可能な開発」の概念の創設に寄与するとともに、

インドネシアにおいて、同委員会最初の公聴会の開催も実現させました。また 1992 年にブラジルのリオデジャネイロで開かれた地球サミット以後、国連において進められた持続可能な開発に関する検討に関し、国連「持続可能な開発ハイレベル諮問会議」共同議長として、議論のとりまとめに貢献しました。1994 年にはブルントラント委員会を模して設立された国連「森林と持続可能な開発に関する世界委員会」の共同議長となり、広く世界の声を聞き、危機に瀕する森林の保全に関して強く「持続可能な開発」の必要性を訴える報告書「われらの森われらの未来 (Our Forests Our Future)」を 1999 年にまとめ上げました。さらに地球サミットから 10 年目のヨハネスブルグサミットでは、その準備会合と位置付けられた第 10 回国連「持続可能な開発委員会 (CSD)」の議長として、また国連「持続可能な開発に関する世界首脳会議」準備委員会の議長として、ヨハネスブルグ実施計画の原案の作成及び合意形成に尽力し、国際的な外交力で難しい国際交渉を成功裏に結論に導きました。

一方、アジア途上国地域の環境問題にも早くから取り組み、1987 年にはインドネシアのジャカルタで開かれた第 3 回 ASEAN 環境大臣会議の議長として ASEAN 環境プログラム III を決定しました。このプログラムは 1988 年から 5 年間の ASEAN 環境分野における協力目標やプログラム、実施計画を設定しています。さらにアジア太平洋環境開発フォーラムのすべての実質会合に参加し、アジア固有の価値を世界に広めること、異文化理解を促進することが重要であることなど報告書の中核となる重要な指摘を行い、同フォーラムによるヨハネスブルグサミットへの提言や最終報告書のとりまとめに貢献しました。博士は ASEAN 環境大臣会合や高級事務レベル会合などにおいて常に議論をリードしました。これまで、アジアの途上国は環境問題の国際舞台においてほとんど発信することがなかった中でサリム博士が先駆者となり、アジアの途上国の意見が世界に発信されることとなったのは大きな意義があります。

環境大臣としての任期終了後、博士はインドネシア大学で教鞭をとるかたわら、各種の環境 NGO 活動の推進に尽力し、インドネシアにおける「持続可能な開発財団」「インドネシア生物多様性財団」等を創設するとともに、各種普及啓発活動の中核として活躍しています。1994 年に創設され、博士が理事長を務める「インドネシア生物多様性財団」は、インドネシア、日本、米国の政府間で、インドネシアにおける生物多様性の保全を目指しています。さらに博士は、ザンビア、ガーナ、モザンビーク、エチオピア、タンザニア、ケニヤ、ジンバブエ、象牙海岸等のアフリカ諸国で環境政策を指導しています。

サリム博士は世界に先駆けて開発計画に環境配慮を統合させ、一貫して「持続可能な開発」実現のため、インドネシア、アジア途上国、アジア太平洋地域、そして全世界を対象に優れたリーダーシップを発揮して地球環境をよりよくすべく国際的に活躍、地球環境の保全に多大な貢献をしました。

〔略歴〕

1930	6月8日南スマトラ生まれ
1958	インドネシア大学経済学部卒業
1959-1964	カリフォルニア大学バークレー校経済学科 (博士号取得)
1970-1972	国家改革担当大臣及び国家計画会議副議長
1972-	インドネシア大学経済学部教授
1973-1978	交通・通信・観光大臣
1978-1983	開発管理・環境担当大臣
1983-1993	人口・環境担当大臣
1983-1987	国連「環境と開発に関する世界委員会」委員
1992-	インドネシア持続可能な開発基金理事会議長
1993-2003	インドネシアエコラベル協会会長

1994-2003 インドネシア生物多様性基金理事会議長
1994-2003 国連「森林と持続可能な開発に関する世界委員会」共同議長
1995-1999 国連「持続可能な開発ハイレベル諮問会議」共同議長
2000-2002 第10回CSD議長
2001-2002 国家経済評議会議長
2001-2002 国連「持続可能な開発に関する世界首脳会議」準備委員会議長
2001-2002 政府経済問題顧問

〔主な受賞歴等〕

1973 インドネシア政府ビンタン・マハプトラ賞
1982 オランダゴールデンアーク賞
1990 ポール・ゲッティ賞
2005 Zayed Prize Winner for Environmental Action Leading to Positive Change in Society

受賞の辞

宮脇 昭博士

このたび国際的に高く評価されているブループラネット賞を受賞いたしますのは大変な栄誉です。長年、地味な現場からの研究を御指導、御支援下さった行政、企業、そして森づくりに携わられた市民の皆様に深く感謝いたします。

私はかつて大学の恩師に「君の研究は大事であるが、たぶん誰にも相手にされない。一生目の目を見ないであろう。しかし君が生涯をかけてやりきるならぜひやりたまえ」と言われ、もっぱら現場で自分の体を測定器にして雑草の生態を調べました。その後、生涯の恩師となったドイツのライフオルト・チュクセン教授の下に留学して「雑草は取るから生える。大事なことはその土地がどのような植物を育てる潜在能力をもっているかである」と、潜在自然植生の理論を徹底的に教え込まれました。帰国後、雑草から森まで、現地調査で日本国中を歩き、あらゆる植物群落を調べ、地球規模で体系化しました。現場を調べれば調べるほど土地本来の森があまりにも少ないのに驚き、いのちを守る防災・環境保全林—潜在自然植生を顕在化した本物の森—を再生すべく、日本の伝統的な鎮守の森と生物集団と環境の総合科学、植生学が支える潜在自然植生を調べ、森の主木群を主に自然の森の掟に沿って木々を植えてきました。気がついたら、国内外で市民の皆さんと共に 1500 ヶ所、3000 万本以上植えた幼木は、何れも千年続くいのちを守る森へと確実に育っています。

このたびの栄えある受賞を機会にさらにエコロジーの脚本にしたがって足元からすべての皆さんと共にいのちと心と遺伝子を守る土地本来の森を日本からアジア、世界に広げたいと決意を新たにしています。

エミル・サリム博士

「開発」とは、地球の自然の恵みそしてそれをとりまく生態系を活用するために、人間、社会そして人が作った資産をうまくやりくりすることだと一般に考えられています。これら資産の価値というものは市場で決めることができますが、自然の恵みとかそれをとりまく生態系に市場は存在しませんし、お金で計ることは出来ないのです。それらは、経済の外にあるものと考えられ、「開発」の対象としてしか見られていません。その結果として、「開発」は環境を劣化させることとなります。世界の人々は、経済物資、そして収入の増大がもたらされるにつれて、生命維持のための生態系が破壊されるのを目の当たりにしてきました。

従来の「開発」についてのこの見方が変わらねばならないという私の考えを支持するものとして、2006 年ブループラネット賞を受賞するのを私は大変うれしく思います。「開発」は環境を破壊することなく行われねばなりません。そのためには、経済面からの、社会面からの、そして環境面からの配慮が、経済の量的にも人間の質的にも人々の福祉の向上をもたらす持続可能な開発というひとつの力にまとまるよう変えていくことが求められます。それには市場の失敗を正すため介入することが必要です。そして、透明な政策決定に対する人々の参加を必要とします。そして更に、短期的な経済目標を越えた開発目標への広い視点が必要とされるのです。それは、全能の神が与えてくれた清明な自然環境下で、貧しく、弱く、傷つきやすい人々がまともな生活が出来るよう助けようとする人道的な仕事を目指しているのです。

<受賞者からのメッセージ>

日本の皆様へ

宮脇 昭博士

環境を守るとはいのちを守ることです。人間が地球上で生かされている限り我々は生きて
いる緑の面積が芝生の30倍ある土地本来の森の寄生者の立場でしか持続的かつ健全には生
きてゆけません。その本物の森があまりにも少なくなっています。いのちの森づくりを、先
見性を持った行政、企業そして何よりも大変多くの市民の皆さんと共に進め、これまで日本
国内1300ヶ所以上、そしてボルネオ、アマゾン、中国などで3000万本以上の木を植えました。

自分のいのちは自分で守らなくてはなりません。いのちある限り皆さんと共にあなたの、
あなたの愛する人の、そして隣人たちのいのちと心と、そしてかけがえのない遺伝子を守る
本物の森を創っていきましょう。

木を植えることは心に木を植えることであり、21世紀のいのちの哲学です。この度の輝か
しい受賞を機にさらに皆さんと共に足元から世界に、すべての人の豊かな感性を育み、知性
を高める、本物の防災・環境保全林を創っていきたく願っています。

素晴らしい明日のために生態学的知見にもとづいて多様な機能をもつ土地本来の本物の森
を目指して共に額に汗し、大地に触れて木を植えてがんばりましょう。

エミル・サリム博士

世界に向けた日本のイメージは、静かな自然環境に包まれた荘厳な「富士山」と、絶えず
喧騒に満ちたダイナミックな都市東京の姿です。これら二つのイメージは、ダイナミックな
経済発展にとって穏やかで手入れの行き届いた自然環境との調和が必要なことを象徴してい
ます。

世界はますます狭くなり、人間はますます増大しています。このような状況の下では、持
続可能な開発の道筋を進んでこそ経済発展と環境の質向上を両立しうることを、日本が世界
に示すことが絶対に必要となります。